武田泰淳全集

第四巻

武田泰淳全集

第四巻

筑摩書房

武田泰淳全集　第四巻
昭和四十六年八月二十日　初版第一刷発行
昭和五十三年四月十日　増補版第一刷発行

著者　武田泰淳
発行者　岡山猛
発行所　株式会社　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
郵便番号　一〇一―九一
電話　東京(291)七六五一(代表)
振替　東京　六―四一二三
印刷　株式会社　三松堂
製本　和田製本工業株式会社

Printed in Japan　0393―72404―4604

第四巻　目次

美貌の信徒……3
耳……16
勝負……26
飛瀑の女……44
父子の情……63
幻聴……70
銀色の客人……88
風媒花……102
天と地の結婚……271
解説……小田切秀雄……447
解題……457

小

説

4

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

美貌の信徒

K病院は神奈川県S市の郊外、なだらかな丘陵の一角を占めている。簡素な木造の教会堂、低い金網の垣に薔薇の蔓をからませて区切られた平坦な敷地、細い木組を白く塗ったアーチ型の開放的な正門、金髪の児童のたわむれる石畳の通路、すべてキリスト教病院らしき清楚なおもむきである。毎朝十時にはオルガンの音が漏れ、毎週土曜には善男善女が家族うち連れ立って、異国風な祈りに集う。新教再臨派では、土曜日が休日である。自家用車を横づけにする外人の信徒が多いが、附近の貧しい日本人も自由に出入している。

婦長はたくましい外国婦人だが、看護婦の大部分は、未婚の日本女性である。一風変った事件を惹き起した竹村星子は、仲間の信望を一身に集めた美貌の一等看護婦であった。

看護婦はもちろん熱烈な信徒、したがって患者の取扱いは鄭重である。彼女たちにとって、病院内の勤務は神への奉仕、献身の行為である。禁酒禁煙、見舞の客も煙草に火を点ずるのを遠慮せねばならない。彼女たちの皮膚が卵の殻に似てすべすべしているのは、菜食主義を堅く守っているためである。会話もささやくように低く、靴音高く廊下や控室に踏み入った客は、彼女たちの漂わす静粛と温和な雰囲気に、思わず息をひそめて、四囲をうかがう程である。

その夜、竹村星子はベルの音を聴くと、白い帽子の下に、父親ゆずりの濃い眉をかすかにひきしめ、二階の看護室を出た。女学校を想わせる玄関の扉は常にひらかれ、夜半の客はベルを以て案内を乞う。白昼でも靴ぬぎ場に守衛一人いないのは、盗難が皆無だからである。

白靴下に白短靴の足どりも軽やかに、長身の星子が応接間に入ると患者はすでにクローム製の椅子の背にもたれて、顔を伏せていた。一見して、出産を希望する妊婦とわかる。緑色の外套、真紅のワンピースが、広い応接間に玉突台の如く置かれた長テーブルの向うに、毒々しくあざやかであ

る。「御入院ですか」と声を掛けても、乱れたパーマネントの髪をだらしなく垂した相手は首をあげない。陣痛が始まっているのかと傍へ寄ろうとすると、夫らしき青年が重い扉を押してソフトを脱いだ。色の浅黒い、痩型の美男子で、大きな風呂敷包みを手にしている。

「診察を受けに来られたこと御ありですか」

「いいえ、まだですが」と、男は気弱く答える。受持の医師の許可を経てから入院するのが規則である。妊婦はことに、血液検査や体質その他、予備知識を必要とする。

「そうですか。では患者カードもお持ちでないですね」物やさしくたずねられると、男は当惑のそぶりを示した。産科のベッドは二台空いている。人を救うのが義務である彼女は、急に迫られた客を逐い返すつもりはない。

「一人部屋はふさがっておりますが、皆さんと御一緒でよろしいですか」

「三等ですか。一等二等は駄目なんですね。どうする、広子。三等でもいいだろ」

「厭だなあ。一人部屋は無いの？　外から見たら灯のついていない部屋が見えたじゃないの」礼儀正しい夫にくらべ、ひどく乱暴な調子で若い妻は不満をむき出しにした。妊婦が色白の丸顔をグイと持ち上げたとき、冷静な星子もわずかながら表情をこわばらせた。半面の手ひどい火傷の筋が、高い天井から落ちる電灯の光線に、鈍く光ったからである。まだ一年と経過しない傷痕であろう。口もとを赤黒く染めた不快な斑色が、まだ消え去っていない。

「ここはスティームがあるし、設備もいいよ。今さら仕方がない、入れてもらおうよ」

「だけど規則がやかましいんでしょ」

「ここなら信頼できるよ」

「あなたは厄介払いしたつもりで、いいかも知れないけど、わたし厭だなあ。西洋人ばっかりだもの」

男がなだめるだけ、女は反抗的に出る。星子は負けぬ気の女性だが、人並すぐれた意志の力で感情を抑制できる。患者の非礼に一々動揺するような新米ではない。彼女の眼からすれば、患者のみならず、人類の全部が哀れみいつくしむべき罪人である。夫婦は二人とも鋭い眼光に邪悪の輝きを蔵しているが、彼女は平常通り分けへだて無く、階段を先に立った。

妊婦の寝衣、赤ん坊の産衣（うぶぎ）、おむつ、すべて病院から支給される。七つ並んだアメリカ式の高いベッドの一つに、支給された純白の寝衣に着換えて妻がもぐりこむと、青年は衣類を包み直して病室の外へ出た。階段の降り口で星子とすれちがう時、青年は「ちょっと」と、ねばっこいかすれ声を掛けた。「女房はこれがありますから気むずかしく

て」自分の片頬を指さして苦笑したが、それが陰気でわざとらしい。「この病院の方は皆さん親切らしいから、こちらも安心してますが」

「同室の方、皆さん愉快にやっていられますから、御心配なく」やれやれと言う形で肩をすぼめて階段を降りて行く後姿は、善良な夫の物ではない。どんよりと濁った大きな眼は、いやらしかったが、その深い暗さが星子の印象に残った。

四谷広子と呼ぶその妊婦は、翌朝の六時に発育の良い女児を分娩した。健康な母体で、産は驚くほど軽い。「いいですか、大きく呼吸して。今度は息を詰めて」体操の号令のような星子の指図を、苦痛も見せずに最後までよく守った。顔面の一部が異様な光沢を放ち、蠟を塗ったように固張って見える。片側の頬がふっくらと幼々しい白さで起伏するのに、傷痕だけが無気味にひきつれている。必死の真剣さで妊婦に見守られながら、その腹部をもみほぐす操作の途中で、星子は生れて来る嬰児の頬に、母の傷痕の無いことを祈った。千人を越す新生命の誕生に立会っている星子だが、異常のない嬰児の顔貌を、産室のカーテンを漏れる、秋の朝の澄んだ光りに確かめると、新鮮な感覚が過労の四肢にみちわたった。

「あのひと気の毒だね」

院内にただ一人の日本人女医は、昼夜を分かたぬ多忙さに疲れ切った顔から、マスクをはずすと、星子に言った。

「傷がなければ立派な顔つきだけどね」

「赤ちゃんが出来たから、これで安心したでしょう」

有能な将校に対する忠実な下士官に似て、テキパキと事務的に答える星子の胸には、これであの奇妙な夫婦を結ぶ肉のベルトが出来たわと言う、しっとりした感慨があった。

四谷広子が院内の注目を集めたのは、彼女の火傷のためばかりではない。その無遠慮な性格と、もう一つ、若き夫の映画俳優じみた美貌のせいである。四谷夫人は、星子の冷徹な額や彫りの深い鼻すじを時には憎々しげに眺めやるが、さほど気難しくはない。出産完了の気軽さも手伝って、同室者を明るい笑いに誘うこともある。

西洋人の妊婦の仰山な悲鳴が、密閉した産室のガラスをひびかせると、彼女は嬉しそうに哄笑した。「意気地なし。日本の女の方が偉いわ」そのあたりかまわぬ高笑いに同室者は、西洋人看護婦に気がねして、眉をしかめた。「アラ、あの赤ちゃん、妙な泣声を出すわね。ミインミインて蟬みたいですわね」面白がって、産室のさまざまな哭声に耳をすましていた広子のベッドへ、乳の時間に看護婦の抱いて来た赤ん坊が、正にその「蟬みたいな泣声」を発しはじめると、枕を並べた夫人たちは一せいにクスクス笑いした。

「プップクプゥ、プゥプゥプク」と放屁の口真似もした。

四谷氏に対する時だけ、広子の明朗な態度は一変した。病室を見舞う夫の姿を認めると、たちまち彼女のゆたかな丸顔に影が射して、傷痕は意地わるい凄みを増す。同室のインテリ婦人には馬鹿丁寧な言葉を使用するが、夫に対してはひどく下町風な争論をしかけた。「まあ、そう言うなよ。ここは病室だぜ」「なんだ、蜜柑がほしい、と言うから買って来たのに、食べないのか」妻の足もとに椅子を引寄せ、夫は気まり悪げに受け答えする。四谷氏に同情して、広子の暴君ぶりに、憤慨する看護婦もいた。庭の花壇に面した東と南の広い窓は、温い日光を呼び、スティームの熱気に、投げ出した女たちの腕は汗ばむほどである。女たちの持ち去られた尿の甘酸っぱい匂い。籠に盛られた生花の鼻を突く香、もったりした乳の香、体臭と吐息。白いシーツに醜い傷痕をこすりつけ、療後の血色も艶々と呶鳴りつける広子のしゃがれ声を受けとめる、四谷氏の恰好のよい首すじや、青黒くひきしまった頬の肉から、上気した婦人たちは、苦しげに眼をそらす。性慾的な切迫感が、けだるい肌をジワジワと濡らすからである。彼等夫婦の、愛情のじゃれ合いとも、憎悪の嚙み合いともとれる口論の最中に、病身の産婦の一人は、貧血のため失神した。竹村一等看護婦の汚れを知らぬ心が、その罪悪的なギラギラと油ぎった光景を目撃して、ひそかに痛んだのは当然である。それは、神の御手の届かぬ内臓の襞がよじれる如き、不可解な痛みであった。

竹村星子の家は、祖父から三代キリスト教徒である。祖父は病院の瀟洒な職員住宅に、長老として今なお健在である。父も祖父同様、厳格な牧師として、S市では名を歌われた。彼女の父の名を一躍喧伝させたのは、彼が青春時代に敢行した、悽惨な一行為であった。父は十字架上のキリストに学んで、その苦痛を自らの肉身に試みたのである。

教会堂の尖塔が青空に浮ぶ丘陵の、周辺にひしめく貧民街、そこに竹村一家は二間の家を借りた。星子の母が買物からもどると破れ障子の向うで、呻吟の声がする、駈けこむと、岩乗な父の体軀が仰きに、倒れている。そのシャツ裸の身体が、古畳の六畳一杯にひろがって見えたのは、重ね合せた両脚を垂直に伸し、それと直角に両手を左右に開いていたためである。おびただしい血潮。それは重ねた二つの脚先を刺し貫いた五寸釘の根もとから噴き出し、畳を赤黒く染めていた。左手の甲も同様、釘づけにされ、血にまみれた五本の指は、岩にへばりついたひとでに似ていた。右手には金槌が握られたままである。すでに自由を失っている左手で、右掌に聖なる釘を打ち込むのは不可能である。刑の執行者を持たぬ父は、その点だけ、十字架上のキリス

トの苦痛を学ぶことは出来なかった。肉に突き刺った釘も、畳の上に散らばった釘も、赤錆びた物が選ばれている。苦痛を忍び、失神に堪えている父の顔は、眉も太く、鬚も濃い。キリスト臨終の顔貌より、その両側で永久に昇天できぬ、兇悪な強盗のそれを想わせた。

当時、星子はまだ母の胎内にいた。彼女の幼年時代、父は家族を棄てて、漂泊の旅に出ていた。家庭にもどった父は、若き日の自発的磔刑に関しては一度も語らない。だが星子は、埃くさい畳に押しつけた父の掌のひらと、足の裏の感触、金槌を振り上げる直前の呼吸、打ちおろす瞬間、激痛、目まい、それからまた別の一撃、血液の流出、そして煤のさがる天井を睨んで横たわっている間の恍惚と恐怖、それらすべてを自分の全身で感覚することができた。キリストの再来、再臨派の人々はそれを信じている。父の上にキリストが再現したとは、星子は考えない。だが父の味わった肉体的苦痛、それが感じやすい乙女心に、火とも星とも花々ともなって、燃え上り、灼きつき、彼女独特の信念の烙印を消しがたくしていた事は疑えない。神に祈り、天国を夢みるとき、星子がいつも自分の肉体にしみとおる苦痛を味わうのは、そのためである。五寸釘と救い、戦慄と快感、身ぶるいと忘我の境、それが神に奉仕する二十五歳の肉体の奥で交錯した。

退院の二日前、産婦はホットシャワーを浴びるのが習いである。運搬用の手押車に乗せられると、四谷広子は一段とはしゃいだ。星子は三階のはずれのリフトに車を入れると、スイッチをひねって、地下室へ降りる。煖房の不完全な地下室では、患者の脱衣その他、手ばやい操作を要する。肉づきのよい広子の裸身に、星子の冷静な指が、遠慮なく触れる。タイルの椅子の固さになじまない広子の腰は、同性の眼に媚びるようなしなをつくる。熱湯の滝に広子は嬌声をあげる。温い霧が、白い壁を下から蔽って行く。「わたしお湯に入るのが一番好きだわ。顔が見えないで、身体だけ見えるから」湧き昇る白い靄に隠現して、広子の肉体は、看護婦の眼にも見事である。「わたしの顔、凄いでしょ」「痛かったでしょうね」と、打ち返すようにたずねた時、星子の白装束をぎごちなくしていた水蒸気が、モアッと彼女の口腔を襲った。

「痛みなんか、熱湯をぶっかけられて、一週間ばかりだったわ。問題はそのあとよ」

浴後の広子は、連れ出された芝生で、素直に語った。

「ぶっかけた四谷は、もちろん憎らしかったわ。そうよ。神様にぶっかけられたら、神様だって憎らしいわ。生かして置くもんかと思った。だけど駄目よ。すぐ自殺すりゃよかったの。生きてる以上、駄目なのよ。だって、やっぱり、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

四谷が好きだし、それに、焼餅だけでこれだけのことやらかしたとしたら、どう考えたって、四谷のその気持、たいしたもんでしょ」

青黒い棕梠の葉が、灰色の煉瓦塀にのぞき出した部分だけ、風に鳴った。濡れ髪が、語り手の傷痕を、なかば隠している。きらめく陽が姉妹のように寄りそった二人の、純白の服装に反射した。

「それからね」広子は、ずるそうなうす笑いで、鼻をクスンとさせた。「我々風情は生きてくのに男が入用でしょ。こうなっちゃ働き口もないわ。すがるのは四谷以外に無いのよ。怒ったって憎んだって、相棒は四谷一人よ。弱みを見せて、拝んだり頼んだりしたらおしまいよ。こっちに権利があるんだと、あくまで主張しなくっちゃね。逃げたがる男を逃がさぬようにする苦心に、変りはないわ。隙を見せないようにいつでも怒っていてやるのよ。うんと、辛く当ってやるんだわ。裁判官か巡査みたいに、おっかぶさって、おどしつけるのよ。いつまで続くかわからないけどね……」

「四谷さんは、おとなしい人に思えるけど、親切な……」

「おとなしくしていなきゃならないのよ。だって今度ぶっかけられるのは、あのひとの番だもの、わたしなら硫酸でやるわ。こうなったら何でも出来るもの。どこへ逃げたって、探し出してやっつけるわ。それでおあいこだもの。ねえ。神様に聴かれたって、当然な話でしょ」

炊事のおばさんが、大皿に盛ったサンドウィッチを、院長室へ運んで行く。「あら今日はハムサンド?」「ちがうのよ。ジャムよ」「肉ならいいのにねえ」と、広子は落胆して、つまらなそうに首を振る。

「許すことは出来ないの?」

「もう、とっくに許してるわよ。だけどぶっかける権利は保有してあるの。最後の権利よ、これは。なかなか使えない権利だわ。使えば何もかもおしまいになる権利だものな」

広子がこんなに率直に、わたしに打ち明け話をするのは何故だろうと星子はとまどう。その気持を見抜いたように、広子は彼女の保護者の頬を、自分の息で暖めるほど近々と「あなたは綺麗ね」とささやく。そしてその言葉の効果を確かめようと覗きこむ。「綺麗な女のひと見ると、わたしいつも考えるのよ。もしも彼女が、わたしと同じような顔にされたら、どんな気持がするだろうなってね。顔に傷をつけられたら、女は誰だって、まちがいなく、わたしみたいな考え方をするようになるわ」

星子には相手が、自分の美しい首すじに透いて見える、血管の網を流れる女の血の速度を量っているのがわかる。

広子の視線がレンズの焦点のように、星子の片頬に、劇薬の痕跡を灼きつけるのが感ぜられる。「わたし達は、人を憎んではいけないのよ。神様の僕は、人を傷けることは許されないのよ」相手をなだめるためではなく、自分の信仰の所在を撫ぜ探すため、星子はそう呟かずにはいられなかった。

「四谷はすぐ警察に出頭したわ。そして病院へ面会に来たの。その時ベッドの上で、わたしが何を考えていたと思う？　え、当てて御覧なさい。……四谷がこれから先、わたしを抱いてくれるかどうかって事よ。わたしを抱く我慢ができるかって事よ」

正門傍に並んだ自家用車の陰で、附近の児童の遊び騒ぐ声が聴える。抱く、抱いた、抱かれる、抱かれた。そのような生ま臭い単語が高まる少年達の嬉戯の叫びにまじって、星子の耳たぶをほてらせた。

「出来れば、なるたけ永く、ここで保養させてやりたいと思うんですが」四谷は星子にそう相談した。「ここなら気分が鎮まりますからね」

「女医さんにお話はしてみますが、十日以上は無理でしょうね。入院希望者が詰め掛けてますから。秋から冬にかけて、産科がいつも満員ですの。それに奥さんは健康体ですからね。外国人など、三日目から廊下を歩く練習してますよ」

「西洋人は別でしょう。連中は車はあるし、召使は居るし、我々とは違いますよ」抜け目ない商業上の取引と、殊勝らしい夫の心づかいが、舶来帽子のへりを往復する、器用そうな四谷の指先に、微妙に入れまじった。

男の神妙な態度の裏を見すかそうとする、心の働きを星子は抑えていた。この男だって、犯した罪で苦しんでいるのだ。それは一生彼につきまとう罪だ。表面的な、まにあわせの善行ではあるが、ともかく罪をつぐなおうと努めているのだ。

応接間の緑色の壁に沿って、皮膚の色を異にするさまざまの患者が、腰を下している。白人の赤ん坊の笑顔を見つめる、割烹着のおかみさんもいた。小さな日本人の母親に笑いかける、大兵肥満の西洋婦人もいた。女たちはそれぞれ、金髪や黒髪の我が子を膝の上で、自慢し合った。白人の子供たちは、ガラス箱の中に陳列された、看護婦の手芸品、熊や縞馬や犬を欲しがっては、よく滑る床の上に寝そべった。乳児をくるんだ花模様の毛布や、日本風のねんねこ、純白や緋色の毛糸のケープなどが、静かな広間に華やかな色どりを添えた。絵入りのグラフや教会発行のパンフレットのページをめくる手をやすめ、男たちは妻とささやき合っては、人種の違う他の婦人や乳児を、愛想よく見守

った。そのなごやかな空気が星子を楽しくさせる。だが彼女は、広子がいつかハンドバッグから取出していじっていた、小さな薬瓶を想い浮べて、不安になる。少量の劇薬を仲介として醸されている、四谷夫婦の危機が彼女をおびやかす。相手に要求されない以上、他人の私事に口出しせぬのが信徒の習慣である。やがて彼女は、その習慣を破らねばならなくなるであろう。

「大丈夫よ、うまくやるわ」退院の日、広子は廊下で、星子に口速く言った。「また何かあったら相談に来るわ。その時は頼むわね」

器量の好い嬰児は、階段の途中で、星子の腕から四谷の胸へ渡された。玄関に待たせた三輪車の幌の内には、買ったばかりの盥の木肌が匂っていた。

一週間後の夜、ミス竹村は同僚の誰もが気づくはずもない、罪深い妄想にふけっていた。清潔で質素な彼女の自室の、クリーム色の壁を飾る一葉の複製画に見入って、彼女の意志の強い唇がひきしめられていた。「ああ主よ」と、マンドリンで弾き鳴らす讃美歌のメロディが、月明の窓ごしに続いていた。中世画家の心魂こめて描いた十字架上の主は、苦しげな眼指を天の一角に投げている。闇と篝火に白々とむき出された脇腹には、喰い入る釘に堪え忍ぼうとする、ひきつけが見えた。苦悩を湛える蒼白な顔面は、異様なほど長めに描き出され、白眼の部分の歯のような白さが無気味である。その夜の彼女は、この偉大なる受難者の肖像から、父の面影ではなく、軽薄才子四谷の暗い眼を想像する自分に驚かねばならなかった。何故、四谷が父よりもなおキリストに酷似していると言う偶然を、神は許し給うのであろうか。

過重な病室勤務、バザー、募金、新刊医学書の濫読、それが彼女の瞳をかすませたのであろうか。絵図は分裂して、無意味な絵具の塊となり、画面は朦朧と近寄っては遠ざかった。そして、棘の冠のあたりから、次第に形をとりもどした。突然、星子は身ぶるいして、胸のふくらみに寒気をおぼえた。キリストの清浄な頬の一部に、何やら傷痕らしきものを認めたと思われたからである。醜い斑点が、その貴尊の人物の顔面の一半を染めていた。痣、腫物の痕、怪しく変色した汚点は、電光の閃きに照らされた如く、チラリと出現して、大きさを増そうとしていた。火傷！　そう判断した瞬間、星子は、ようやく冷汗に濡れる肌を持つ平常の自分にたちかえった。「主よ、許し給え」限り無い冒瀆を敢えてした恐ろしさが、彼女を椅子から起ち上らせた。

発見。それは身の毛のよだつ発見であった。もしも、キリストが万人に愛慕されるあの聖なる御顔の一部に、火傷の痕を示されていたらと言う、想像。それが聖処女星子を

打ち砕いたのである。もしも、嗚呼、もしも。四谷広子の如く、もしも主が醜きひきつれで、その美しい顔面を汚されていたら。主は同じ訓えを垂れ、同じ救いをわたくし共に与え給うことができたであろうか。

ベルが鳴った。宿舎に彼女宛の電話のかかった知らせである。「四谷さんと言う男の方から」と、受附係が彼女に告げた。玄関で待っています。広子のことで至急御相談したい事が出来まして。病院の控室から、暗い眼を持つ、キリストまがいの男の声が、彼女の耳に伝わって来た。

宿舎から庭を横切り、露をかぶった植え込にスカートの裾を濡らし、玄関口まで星子は夢中で歩いた。行儀よく立ち並ぶ職員宿舎は、どれも二階建の窓の一つ一つに家族的な灯火をともしている。月光を受けぬ闇の中を、男のふかす煙草の火が、弧を描いて地上に飛んだ。

「夜分、お呼びだてして申訳ありませんが」

赤らんでいるか、蒼ざめているか、月光を浴びても定かでないが、男の発散する酒気が、湿った泥を踏まえた星子の脚を硬直させた。

「竹村さん、御存知でしょ。我々夫婦のことは」女なれした悪漢の如く、四谷はポケットに入れた両手で、オーバーの両側をゆすった。「哂って下さい。見られたもんじゃありません。困ったもんです。それはそれとして、お願いがあるんです。……広子をあなたの所で預ってくれませんか」

「もう少し、冷静に説明していただかないと」

「奴を連れて来れば、一目瞭然なんだが。つまり完全な狂乱状態ですな。こっちの出ようによっては、赤ん坊に硫酸をぶっかけて、御当人は自殺するとぬかすんですからね。いくら気ちがいでも、見殺しにはできませんよ。僕にだって、責任感てものがありますからね。それに赤ん坊には罪はないし。恥を忍んで、ザックバランに、あなたに、あなたにちょっと、おすがり申そうと言うわけですよ」

「あなたはそれで、広子さんを愛していらっしゃるの」電流のような怒りが、星子の声を高ぶらせた。

「それはねえ、まあ。男女の間柄と言うものには、あなたにわからぬ底がありますよ。少くとも僕と広子は、一対一の勝負ですよ。その点で他人様に御迷惑はかけたくないんだが、奴が奴ですからね」

「わたしとしては、広子さんにお目にかかってからでないと」

「ええ、御もっともです。是非ともお目にかかってやって下さい。そうすりゃ奴も安心するでしょうからね」

わたしは今こそ神の試煉を受けているのだわ、と星子は身ぶるいした。

翌朝、まだ明け切らぬ時刻に、取乱した四谷広子は、星子の自室にひきとられた。猛り立った昏迷の域を脱して、おとなしやかな茫然自失状態に入ったのが、二日の午後である。それ以後は、慈母の膝に睡る乳児のように、美しい保護者にもたれかかった。四谷に情婦ができた、それが原因である。「もうあきらめたわ」と嘆息するが、いくら世間知らずの星子でも、それを信用できるはずはなかった。

「四谷さんと別れて、自分一人で生活する工夫をしたら？あなたがその決心なら、わたし、いくらでもお助けするけど」

「ええ」ビロード製の象の玩具を縫いあげながら、そう答える広子の肩つきは弱々しい。それが星子には歯がゆかった。劇薬の小瓶は取りあげて、錠のかかる西洋箪笥の抽斗（ひきだし）にしまった。

「あなた何故、四谷さんに硫酸をかけないで、赤ちゃんにかけようとしたの？」

「よくはわからないけれど。たぶん、火傷でひきつれた四谷の顔を見るのが恐かったんだわね」

「しっかりしなきゃ駄目よ。あたし達には、赤ちゃんを救う義務があるのよ。四谷さんを救うことができないにしてもね」

「そうね、赤ちゃんのことがあるわね」

乳のたっぷりした母親を恵まれた嬰児は親の苦労も知らず、スヤスヤと睡入っている。

星子が四谷の宅を訪れたのは、一週間後であった。広子にはむろん内しょである。広子の近況を報告し、かつは四谷の暮し振りを偵察するのが目的である。その上、彼女には、この色魔を自分の手で、キリスト教徒に回心させたい希望もあった。

訪問はみじめな失敗に終った。四谷が聖処女に、強引な抱擁をしかけたからである。彼女の首すじは男の唾液を浴び、頬には男の歯がたをつけられた。唇も、チューインガムの匂いのする、紫色のなめくじのような唇になめられた。もしも彼女が、五尺四寸のスポーツウーマンでなかったら、主に対して申訳の立たぬ事態に及んだかも知れなかった。敬虔な女が男の侮辱を決して許さぬことを、四谷は愚かにも悟らなかったのである。

広子は次第に教会病院の静寂に溶けこみ、たのもしい信者になり始めたかに見えた。それにひきかえ、星子の濃い眉は、以前のように明るく伸びることをしなくなった。時によって、親譲りの眉が、十字架上の強盗のそれの如く、毛虫に似て、蠕動するのが認められた。

女医の往診に同道して、星子はS市を遠く離れた富豪の家に迎えられた。自家用車で送り還されるまで、三時間は

かかった。帰院するまで、疾走する車内で、しきりに胸騒ぎがした。自室の扉をひらくと、広子の姿が見えない。西洋箪笥の抽斗は、こじあけられている。堅い木部は鋭利な刃物で削られ、白い木屑が孔の下に積っている。その刃物も広子は携行したにちがいなかった。

塵埃の充満する罪悪の街の、どんよりと濁った空気を突き破るように、彼女は銀色の自転車のペダルを踏んだ。白帽子を棄てた彼女の黒髪は、黄昏の風になびいた。それはあたかも、悪魔の黒い舌のように、ヘラヘラと燃えくすぶっては、逆立った。四谷の住む古びたアパートは、黄金色の夕焼空を背景に、墓場の如く灰色に立っていた。踏板の傾いた階段の下で、おかみさん達が、口汚く罵り合い、姿を見せぬ子供を夕食に呼び、帰りの遅い亭主の噂に打ち興じていた。

四谷の部屋はヒッソリと物音がしない。悲鳴も叫喚も聴えなかった。「わたしとは無関係に、悲劇は遂行されてしまったのか」と、彼女は思った。だが、彼女の役割はまだ終ってはいなかったのだ。

首うなだれた広子の傍で、赤ん坊が泣き出したのは、星子の血相変えた駈け込みのためだったかも知れない。兇行が行われたにしては、あまりに物淋しい光景である。電灯もともさぬ薄暗がりの室内に、紫がかった青い光線が射しかけている。四谷は足先だけ毛布をずらして、屍のように横臥している。しかも彼の身体は、グルグル巻きに、縄で縛りあげられていた。ガウン風の寝衣の袖から、ねじれた手首が、浅黒く覗いている。腹部が上下しているのはまだ生きている証拠だ。よく見ると荒縄と錆覚されたのは女物の腰紐と、薄地の下着の類だった。顔！　それはまだ何の傷も受けてはいなかった。眼こそつぶってはいるが、その顔はまだキリストに似て、無傷だった。

問いただすまでもない事であった。やり切れない沈黙に、星子は堪えた。やがてすすり泣きと共に、広子は語り出した。

「四谷が色女と駆落ちしかかってるって友達が教えてくれたの。それで、フラフラとここへ来てしまったのよ。お酒に睡り薬を入れて、飲ませたわ。それから身動きできぬように縛ったの。そこまではうまくいったの。だけど硫酸をぶっかける事が、どうしても出来なかったの」

「あなたは弱いひとね」星子の声にふくまれた冷い火焔に、広子の気づくはずはなかった。「四谷を裁くことが、あんたにはできないのね」

「このひとが死ぬまで、わたしは苦しむのね。このひとはわたしを苦しめっぱなしにして、生きて、そして死んで行くのね。やっつける事は永久にできないんだわ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com